

「球技」

～ボールを持たない時の動きに関して～

I 主題設定の理由（アンケート結果も踏まえて）

これまでの授業では、「得意な生徒達がシュートを決め、その他の生徒達は、ただひたすらボールが移動する方向へ進むか、その場からほとんど動かずにいるか、ゴール方向にのみ移動するか」のいずれかであった。また、「ゴール下に団子状態で集まり、囲まれたらどうして良いかわからずボールを上投げる」という様相であった。

アンケートを実施したところ、「パスやドリブルなどでボールをキープすることができる」に、はいと回答している生徒の割合が60%、「パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動こうと意識している」に、はいと回答している生徒の割合が53%、「ボールを持っていない人の動きを意識している」に、はいと回答している生徒の割合が40%であった。この結果、ゴール前の空間に走り込む動きやボールを保持していない時の動きに課題があった。確かに、授業後の振り返りに、「ゲーム中にどこへ動けばパスを受けられるかわからない」と記入している生徒も多くいた。そこで、ボールを持たないときの動きに焦点を当て、研究することで、思考力・判断力・表現力の育成を目指すこととした。

II 中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編の内容

「ボールを持たないときの動き」について、中学校学習指導要領（平成29年告示）解説保健体育編には、「ゴール型」の第1学年及び第2学年では、「空間に走り込むなどの動き」がそれにあたり、「攻撃の際、ボールを持たないときに、得点をねらってゴール前の空いている場所に走り込む動きや、守備の際に、シュートやパスをされないように、ボールを持っている相手をマークする動きのこと」と解説されている。また、第3学年では、「空間を作り出すなどの動き」がそれにあたり、「攻撃の際は、味方から離れる動きや人のいない場所に移動する動きを示し、守備の際は、相手の動きに対して、相手をマークして守る動きと所定の空間をカバーして守る動きのこと」と解説されている。

「ネット型」の第1学年及び第2学年では、「定位置に戻るなどの動き」がそれにあたり、「相手側のコートにボールを打ち返した後、基本的なステップなどを用いて自分のコートに空いた場所を作らないように定位置に戻り、次の攻撃に備える準備姿勢をとることがボールを持たない時の動きのこと」と解説されている。また、第3学年では、「連携した動き」がそれにあたり、「空いた場所を埋める動きなど仲間の動きに合わせて行う動き」と解説されている。

「ベースボール型」の第1学年及び第2学年では、「走塁」と「定位置での守備」がそれにあたる。走塁とは、「次の塁をねらって全力で塁を駆け抜けたり、打球の状況によって止まったりするなどの走塁面と打球の状況によって止まったりするなどの動き」であり、定位置での守備とは、投球ごとに、各ポジションの決められた位置に戻ったり、打球や送球などに備える姿勢で構えたりするなどの動き」と解説されている。第3学年では、「走塁」と「連携した守備」がそれにあたる。走塁とは、「スピードを落とさずに円を描くように塁間を走り、打球や守備の状況に応じて次の塁への進塁をねらうなどのボールを持たないときの動き」のことであり、連

携した守備とは、「打者の出塁や走者の進塁や相手チームの得点を防ぐために、味方からの送球を受けるための中継プレイに備えるなどの動き」と解説されている。

Ⅲ 実践事例 「球技 バasketボール」

(1) 板書の具体例

The image shows a collection of handwritten notes on a whiteboard and a separate sheet titled '練習メニュー一覧' (Practice Menu Overview). The notes are organized into several sections:

- 到達目標 (Learning Objectives):** A box containing the goal of the lesson.
- 授業の流れ (Lesson Flow):** A box detailing the sequence of activities.
- アップメニュー (Warm-up Menu):** A box listing specific warm-up exercises.
- 授業のめあて (Lesson Purpose):** A box stating the intended outcomes of the lesson.
- 過去の振り返り例 (Example of Past Reflection):** A box providing examples of how to reflect on previous lessons.
- 自己評価について (About Self-evaluation):** A box explaining the self-evaluation process.
- 単元計画 (Unit Plan):** A box outlining the overall plan for the unit.
- 練習メニュー一覧 (Practice Menu Overview):** A separate sheet listing various drills and exercises such as 'ドリブル', 'パス', 'シュート', 'ディフェンス', etc.

(2) 単元計画の具体例

1	2・3・4・5・6・7	8・9・10	11・12
オリエンテーション (基礎知識・Aメニュー・試しのゲームなど)	【基本技術】 スリーメンタリスクロス・スクエアパス トライアングル・ショートトウメン (パス・ドリブル・シュートなど)	【応用技術】 ゴールゾーンゲーム 3対2のパス スリーサークルボール 2対1のパス 【スペースへの動き出し】 スリーメンタリスクロス・スクエアパス	試合中心・実技試験 チームで作戦を立てる チームで練習メニューを考え実践する
	簡易試合	簡易試合	

(3) 自己評価例

【自己評価】

- 1, フリーの味方へパスが出せた
- 2, 守備者がいない位置でシュートができた
- 3, 有効なドリブルでボールキープできた
- 4, ゴール前への動きだしを意識した
- 5, ボール以外の人の動きを意識した
- 6, スペース(空間)に走り込むことを意識した
- 7, フェアプレーを心がけた
- 8, 仲間と話し合い、連携して活動できた
- 9, 自分の課題を見つけることができた

日付	1	2	3	4	5	6	7	8	9

よくできた...◎
まあまあできた...○
あまりできなかった...△
ほとんどできなかった...×

(4) 授業後の観戦レポート（学んだことをアウトプット）

【観戦レポートの記入例】

ボールを出さず方向
ゴールに送る
① 相手よりゴールに送るには3歩は行く
② タイミングよく送る
速攻はモデルライン
できるだけ（中央）に運ぶ
ターンレシュート
パス

試合内容
観戦レポート
試合内容
観戦レポート

IV 成果と課題

成果としては大きく3点ある。1点目は、生徒の振り返りの内容が具体的になったことである。自己評価に、ボールを持たない時の動きの例を入れたこと、ホワイトボードに示してある既習事項を引用して振り返りをするよう指導したことが要因であると考えられる。さらに、振り返りの視点を「仲間の良かった動きや学びについて」などや、「疑問に思ったこと」「次回意識して頑張ろうと考えていること」などのような主体的な学びにつながるようにしたことで、表現力が向上し、より具体的な振り返りができたのではないかと考える。

2点目は、『意識』が『形』として表せる生徒が増えたことである。「どんな合図を送れば、スペースへ動き出せるか」について考えたことで、『ハイ』『スペース』『フリー』『空いてる』などの言葉が授業の中で自然に出るようになった。また、『手差し合図』や『味方同士での顔を見合わせての確認』なども増え、ボールを持っている生徒だけが動いている場面はかなり減ってきたと思われる。授業後、授業前と同じようなアンケートを行ったところ、「パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動こうと意識している」、「ボールを持っていない人の動きを意識している」などの質問に、はいと回答している生徒の割合もほぼ100%という結果となった。

3点目は、話し合いが活発になったことである。学校評価における授業アンケートでも、「グループ活動により自分の考えが深まっている」「クラスの人意見が参考になっている」に対する肯定的回答が100%であった。発問を工夫したことで、それぞれの役割について話し合うことができたからだと考える。また、観察する視点を設定し、観察したチームに対して良かった動きを説明するという取り組みをすることで、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫する力が身についたのではないかと考える。

次に課題としては大きく2点である。1点目は、評価についてである。記入内容や発言を適切に評価できているのか疑問である。指導と評価の一体化とよく言われるが、評価をどう位置付けるのかは非常に難しいと感じた。2点目は、基本的な技能の定着の2極化が顕著に表れたことである。思考力・判断力・表現力の育成に対しての実践であったこともあるが、考え・判断し・表現するためには、それなりの時間を設定しなければならない。今回は、その時間をこれまでより、意識的に多く設定したので、技能の成熟が追いつかない生徒が顕著にあらわれた。今後は、そのバランスをもう少し工夫していく必要があると考える。